

「結婚祝い」のマナー

今日の結婚のお祝いは、披露宴当日にご祝儀を持参するケースが大半。しかし、本来は品物で贈るのが正式でした。祝う気持ちが大切な結婚祝いですが、最低限の心配りだけは忘れないようにしたいものです。

◆結婚祝いの本来のかたち

結婚祝いをお渡しする正式な作法は、披露宴の当日、会場でお渡しするのではなく、挙式前に先様宅に持参することです。結婚式の1週間前までの“吉日”午前中に直接お届けします。最近では、日没を避ける意味で午後の2時～3時までならよいとされており、また遠方の場合は郵送などでもかまいません。その際、お祝い品を贈った旨の手紙を別送するといいでしょう。

お祝い品には熨斗(のし)と末広を添え、片木盆(へぎぼん)の上に乗せて袱紗(ふくさ)をかけるか風呂敷に包んでお届けします。

熨斗(のし)

長生き、長持ちの印。本来はアワビを伸ばして干したものの。

末広(すえひろ)

純白の扇。長寿と健康を表します。

片木盆(へぎぼん)

神仏への供え物を載せる盆。曲物(まげもの)とも云います。

◆金包みは結び切り

金包みの水引きには、紅白または金銀夫婦結びを基本として“あわび結び、輪結び、老の波”などを組み合わせた豪華なものをなお「御臚(おはなむけ)」として金品を贈ることもあります。また結び方は、通常の慶事の場合は何度繰り返してもよいという意味で「蝶結び」にしますが、結婚祝いに関しては、繰り返すことのないように「結び切り」にします。

◆式の当日に贈るのは略式

現在のように、結婚式当日にご祝儀を持参するのは、略式のお祝いです。ご友人や会社関係の方へお祝いをお渡しする際は挙式当日でも構いませんが、親族やご兄弟など血縁関係の方がご結婚される場合は、正式な結婚祝い

が望まれます。品物を式場に持って行くのは完全なマナー違反です。

結婚祝いをする相手が格式を重んじる方であれば正式な贈り方が理想ですが、相手の都合によっては出先で手渡すなど、柔軟に対応するのが良いでしょう。

◆タブーとされている贈り物

昔、鏡や陶磁器は運んでいる途中で割れたり、欠けたりするので、二人の仲が「割れる」として忌み嫌われ、刃物類も「二人の仲を切り裂く」としてタブーとされていました。また石鱈類も「洗い流す品」として嫌います。タブーとされているものを贈る際は、刃物なら「おふたりの未来を切り開いてください」など、ひと言つけ加えて贈りましょう。また数字では、3・5・7は吉数で、4・9が不吉とされています。

◆内祝いは半額が目安

披露宴に出席された方には内祝いは必要ありませんが、結婚祝いをくださったのに披露宴に招待していなかったり、披露宴をご欠席されてしまった方には内祝いできちんとお返しをします。もちろん披露宴に出席された方でも親族には内祝いを渡す場合もあります。

その際、贈られた品と似たようなものにならないよう心がけましょう。

結婚祝いQ&A

Q. 金包みの表書きを書く場合気をつけることは？

A. 表には「寿」「御結婚祝」「祝御結婚」などと毛筆か筆ペン、サインペンで書きます。万年筆やボールペンと言った線の細いものは使わないようにします。毛筆の場合は墨の濃さに注意。一般に慶事は濃く、弔事は薄くします。